

ヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアムの 設置・発展過程における芸術文化政策

国立芸術デザイン博物館における英国の装飾芸術文化政策 (1)

Art Management policies for historical exhibitions of the Victoria and Albert Museum
— A series of studies on the National Museum of Art and Design, UK Part 1

新井 竜 治
Michael Ryuji Arai

要約

ロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアム (Victoria and Albert Museum : 以下 V&A Museum と表記) は、装飾芸術とデザインに関する世界的に重要な博物館であり、多くの国々に模倣された歴史的モデルである。そして、創建から 150 年以上経た現在も、新たな装飾芸術とデザインの博物館を目指して変革の途上にある先進的な事例である。さらに、ビジネス活動を行う V&A Enterprises という株式会社が付属していて、学芸面と商業面を併せ持った事例でもある。この V&A Museum には、「コンテンポラリーな (同時代の) デザイナーおよび消費者の創造性 (クリエイティビティ) を刺激 (触発) することが、クリエイティブ・デザイン産業の振興に繋がる」という考え方が脈々と息づいている。本稿から始まる一連の研究では、V&A Museum の設置・発展過程、収蔵品、常設展示、企画展覧会、出版物、調査研究体制、外部機関との関係という「学芸面」と、V&A の商業活動、V&A Museum の資金調達活動といった「経営面」とにおける芸術文化政策の特徴を調査研究した。そして第一部である本稿では、V&A Museum の設置・発展過程の中に見られる装飾芸術とデザインに対する英国の芸術文化政策の特質を明らかにした。また近年英国政府が力を入れているクリエイティブ産業と V&A との関係も考察した。

キーワード：ヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアム、国立芸術デザイン博物館、装飾芸術、デザイン、芸術文化政策、クリエイティブ・デザイン産業

目次

- I はじめに
- II 国立芸術デザイン博物館における英国の装飾芸術文化政策研究序論
- III V&A Museum の設置・発展過程の概略
- IV クリエーティヴ産業振興と V&A
- V おわりに
- 凡例
- 引用・参考文献一覧
- 注

I はじめに

論者は日本にも「装飾芸術」と「デザイン」に関する国立の博物館が設立されることを切に願うひとりである。本稿から始まる全四部の一連の論考は、装飾芸術とデザインの博物館として世界的に最も重要なロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアムにおける英国の芸術文化政策に関する研究である。この一連の研究の主たる設問は、「ヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアムにおける、装飾芸術とデザインに対する英国の芸術文化政策には、どのような特質が見られるか」というものであり、本研究全体の目的はそれを明らかにすることである。そして第一部、すなわち本稿では、ヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアム（以下 V&A Museum と表記する）の設置・発展過程における芸術文化政策の特質を明らかにすることを目的とする。更に近年英国政府が力を入れているクリエイティヴ産業と V&A の関係に触れる。本研究が博物館学、装飾芸術とデザインに関する芸術文化政策、そして実際の博物館の運営業務にとって何らかの示唆となるならば、この上もない幸いである。

II 国立芸術デザイン博物館における英国の装飾芸術文化政策研究序論

1 研究の目的

英国においては、社会における様々な分野で装飾芸術やデザインに対する保護や擁護が盛んに行われているという印象を強く受ける。このような装飾芸術やデザインに対する英国の芸術文化政策では、色々な要素が複合的に絡み合って相乗効果を発揮していると考えられる。その要素として以下のようなものが挙げられる。

- ・ 装飾芸術を収蔵する英国の博物館・美術館・ギャラリー。
例) Victoria & Albert Museum, Design Museum など。

- ・ 装飾芸術を展示する英国の歴史的建築物およびその管理団体。
例) National Trust, English Heritage など。
- ・ 装飾芸術を扱う英国の教育研究機関・学会。
例) Furniture History Society, Georgian Society, Victorian Society など。
- ・ 装飾芸術品のデザイン・生産・新品流通・中古流通に関わる英国の組織。
例) British Furniture Manufacturers' Association, Antique Dealers' Association など。
- ・ 装飾芸術を管轄する英国の政府機関および政府系組織。
例) Department of Culture, Media & Sport, Design Council, Crafts Council など。
- ・ 装飾芸術を取り上げる英国のメディア。
例) Country Life Magazine, House & Garden など。

これらの各分野には、装飾芸術とデザインに対する英国の芸術文化政策における特質が顕著に表れている。したがって各分野の代表的な事例を研究することにより、装飾芸術とデザインに対する英国の芸術文化政策の全体像を明らかに出来るのではないかと考える。

このような理論の枠組みの中で、今回の一連の研究では装飾芸術とデザインを収蔵する英国の博物館について研究する。そしてその代表的な事例としてヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアム (V&A Museum) を取り上げることとする。

よって本研究の主たる設問は、「ヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアムにおける、装飾芸術とデザインに対する英国の芸術文化政策には、どのような特質が見られるか」というものである。そして本研究全体の目的はそれを明らかにすることである。

2 研究方法

1) 先行研究文献

本研究で研究対象とした V&A Museum は日本でも博物館開設・建設に当たって明治時代初期から参考にしていたことが知られている⁽¹⁾ (石森秀三 2003 : p.232)。岡倉天心とフェノロサもサウス・ケンジントン博物館を訪問してそこに展示されていた明珍宗春の自在鷲に感動して「日本国内でも」その技術を伝える必要性和、刀剣制作技術の伝授の必要性を実感したために「東京美術学校に」鍛金科設置を計画したという (横溝廣子 2003 : p.12)。第二次世界大戦直後に発行された『世界の博物館』の中で棚橋源太郎は、実際に V&A Museum を訪問して観察した事柄を記している (棚橋源太郎 1947 : 自叙 p.3、本文 pp.124-126)。

しかし V&A Museum における英国の装飾芸術とデザインに対する芸術文化政策といった観点からの研究は数少ない。論者が渉猟した参考文献の中には V&A Museum における芸術文化政策を論じたものもあったが、ある特定の期間に関する研究に留まっている印象が強い。例えば、菅靖子の「悪趣味の展示—装飾製品美術館の『恐怖の部屋』」(菅靖子

2000) や「ヴィクトリア朝における趣味の政治学—装飾美術館の『戦慄の間』」(菅靖子 2001) においては、製造業者や一般公衆に対して「趣味」を教育する博物館としてのサウス・ケンジントン博物館時代の姿がまとめられている。また藤田治彦の『西洋の工芸博物館の比較研究：デザインミュージアムの原型・日本の博物館の史的モデルとして』の中では「サウス・ケンジントン博物館における工芸関係展覧会とその前史」が語られている(藤田治彦 2003 : p.18-25)。近年の興味深い研究に鬼頭智美の「ロンドンの大型博物館・美術館における広報活動について—大英博物館の事例を中心に」(鬼頭智美 2003) と「博物館としてのブランドについて」(鬼頭智美 2005) がある。この中で鬼頭は V&A Museum における現在の英国の装飾芸術とデザインに関する芸術文化政策に触れている。

一方英国においては、V&A Museum の発展の歴史的経緯が比較的良く文書にまとめられている。そしてその歴史についての研究著作は 1990 年代後半になって多少出版されるようになった。例えば、アンソニー・バートンの『ヴィジョン&アクシデント』(Vision & Accident)⁽²⁾ が代表的な著作である。これらの著作には一次資料への手がかりが数多くある。しかしながら英国においても、V&A Museum における装飾芸術とデザインに対する芸術文化政策の全体をまとめた研究はほとんど見られない。

そこで本研究においては、様々な先行研究文献を参考にするとともに、V&A Museum の内部文書である『収藏品管理方針』(V&A Collections 2003) や『収集計画書』(V&A Collections 2004) および V&A が発行しているリーフレットなどの一次資料を丹念に分析して、V&A における装飾芸術、デザイン、そしてクリエイティブ・デザインに関する芸術文化政策を探求した。

2) 本研究での研究方法

徳丸吉彦が「『見えない芸術文化政策論』を探るのが、今後の課題になるだろう」(徳丸吉彦 2003 : p.21) と述べているように、英国における装飾芸術とデザインに対する芸術文化政策に関しても、明文化されたものと、明文化されていないものがあると考えられる。明文化されたものとしては、政府の所管省庁および当該機関が発行した報告書、計画書、種々の文書、声明、出版物、マニュアルなどが挙げられる。そして明文化されていないものとしては慣例、常識的な判断などが挙げられる。また、企画を担当した当事者の頭の中にあるが正式な報告書として明文化されていない事柄もあろう。これらの明文化されていない事柄は、現場における観察や当事者に対するインタビューを通して浮かび上がってくる。したがって、本研究では明文化された資料を渉猟して分類整理するという作業に留まらず、現場における観察やインタビューから浮かび上がってくる原理原則を合わせて分類整理するという作業を行った。このように本研究の方法は帰納的アプローチである。すなわち個々の具体的な事柄から一般的な命題や法則を抽出する方法である。

また、論者が英国のインテリア史および家具史の研究を専門とすることから、収藏品部

門に関する調査では、主に家具・繊維・ファッション部門の中の、家具部署の学芸員に対するインタビューが中心となっている。さらに商業活動に関しては、論者が家具調度品産業界の出身という背景から、英国大使館商務部を通して紹介されたヴィー・アンド・エー・エンタープライズ株式会社（V&A Enterprises Ltd.：以下 V&A Enterprises と表記）の担当者へのインタビューを中心に調査を行った。

3 研究対象の設定

さて今回、装飾芸術を収蔵する英国の博物館における装飾芸術文化政策を研究するに当たって、V&A Museum を事例として取り上げるには幾つかの理由がある。第一に、V&A Museum は名実ともに世界を代表する偉大な装飾芸術とデザインを中心とした博物館である。その収蔵品は 500 万点にも及び、収蔵品の領域の幅広さと奥行きでは他に類を見ない。また、144 のギャラリーを擁し、年間 250 万人の来場者⁽³⁾ を迎え、数々の企画展覧会を開催し、多くの書籍を出版し、特別イベントも多数開催している。第二に V&A Museum には、英国の装飾芸術とデザインを巡る芸術文化政策における諸相である、装飾芸術を展示する英国の歴史的建築物およびその管理団体、装飾芸術を扱う英国の教育研究機関・学会、装飾芸術のデザイン・生産・新品流通・中古流通に関わる英国の組織などとの興味深い関係が見られる。第三に、V&A Museum は多くの国々の博物館・美術館に模倣された装飾芸術とデザインに関する博物館の歴史的なモデルであるとともに、その創建から 150 年以上を経た現在でも新たな装飾芸術とデザインの博物館を目指して変革の途上にある先進的な事例である。第四に、V&A Museum にはビジネス活動を行う V&A Enterprises という株式会社が付属していて、学芸面（Curatorial Side）と商業面（Commercial Side）という両面を併せ持った事例である。

尚現在の V&A Museum の組織には、その発展過程で「ベスナル・グリーン子供博物館」（Museum of Childhood at Bethnal Green）と「演劇博物館：国立舞台芸術博物館」（Theatre Museum — The National Museum of Performing Arts）が付属している。しかしこれらは本研究の研究目的に直接的な関係が薄いので、今回は必要に応じて適宜言及するに留めた。

4 語句の定義

1) 装飾芸術

利光功は『工芸と装飾美術—比較芸術学的考察』の中で、「わが国では…工芸を実用性と美的価値を兼ねそなえた芸術の一領域として捉えている」（利光功 2000：p.80）とした上で、「[英国には] わが国の工芸に対応する用語としては、decorative arts, practical arts, useful arts のほか applied arts, industrial arts, minor arts, technical arts, arts and crafts,

utilitarian arts のように、類似しながらもそれぞれ意味と由来を異にする術語が使われていて、精確・簡潔に示す単一の術語がないことは事実である」(前掲書：p.80)と述べている。そしてウィリアム・モリスが1877年に行った「装飾美術」という公開講演で熟練工を前にして手仕事の復権を訴えたことに触れて、モリスは装飾美術 (decorative arts) の名の下にわが国の工芸に該当する考えを展開したと結んでいる(前掲書：p.83)。このように利光の解釈では英語の「decorative arts」を日本の「工芸」と同義語とみなしているようだ。また利光によれば、ドイツ語圏では Kunstgewerbe がわが国の工芸とほぼ同義語であり、仏語では工芸の同義語として、産業美術 (arts industriels) や応用美術 (arts appliqué) ではなく、装飾美術 (arts décoratifs) が19世紀から使用されていた。その理由として利光は、装飾美術中央連合によって1877年に設立されたパリの装飾美術館の存在、1898年から1910年まで刊行された月刊美術雑誌『装飾美術』、そして1925年のパリ万国博覧会「国際装飾美術展」を挙げている(前掲書：p.80-81)。

また天野知香は『装飾／芸術—19-20世紀フランスにおける「芸術」の位相』の中で、「1870年代から80年代を通して明らかになったのは、もはや産業に対する芸術の応用ではなく、また産業か芸術かといった議論でもなく、従来の『芸術』の概念に代わる、『装飾芸術』という新たな美の形式が成立したという重要な事実である」(天野知香2001：p.71)と述べている。そして、「舞台や、あるいは建築や室内の装飾に関して用いられた『装飾芸術』という言葉は、やがてそれまで広く用いられていた産業芸術 les arts industriels という語に置き換わる新たな概念となってゆく」(前掲書：p.72)と結論付けている。

このように19世紀後半に出現した「装飾芸術」という表現は、わが国の「工芸」と同義語であるとする考え方があがる。しかしながら西欧で用いられた「装飾芸術」が、わが国の「工芸」とは異質の概念であることもまた否めない。そこで本研究では「decorative arts」を「工芸」とは言わず、あえて直訳の通り「装飾芸術」とした。尚、本研究では天野の訳語を用いて「decorative arts」を「装飾美術」ではなく「装飾芸術」と呼ぶこととする。

2) 装飾芸術博物館と芸術デザイン博物館

V&A Museumはその創設の頃から幾度も名称を変えてきた。前身である官立デザイン学校(The School of Design)は、1852年に製品博物館(Museum of Manufactures)として設立され、1853年に装飾的芸術博物館(Museum of Ornamental Art)と改名され、1857年にサウス・ケンジントン地区に移転してサウス・ケンジントン博物館(South Kensington Museum)と呼ばれた。1899年ヴィクトリア女王臨席のもと、現在の本館正面増築部分の定礎式が行われ、ヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアム(Victoria and Albert Museum)に改称された。その後今日まで一般的な名称は変化して

いないが、研究者、メディア、一般公衆は V&A Museum を色々に呼んできた。

つい最近まで V&A Museum は「世界最大の装飾芸術博物館」(The World's Largest Decorative Art Museum) と謳われてきた。しかし今日では自らを「世界で最も偉大な芸術とデザインの博物館」(The World's Greatest Museum of Art and Design) と呼んでいる (V&A Museum ホームページ 2004)。このように V&A Museum は「装飾芸術に関する博物館」であるとともに、「芸術とデザインに関する総合的な博物館」でもあるとの自己認識を持っている。

V&A Museum の主な収蔵品の分野は、家具・木工、繊維、ファッション、彫像、陶磁器、ガラス器、金属細工、宝飾品、建築図面、写真、水彩画、素描、パステル画、細密肖像画、商業グラフィックス、芸術関連図書・芸術的書籍、子供関係、演劇関係である。確かにこれらは「装飾芸術」と「デザイン」の領域にまたがるものである。そして近年、英国政府が「クリエイティブ産業」を輸出しようという政策を全面に押し出しているため、クリエイティブ・デザインにまでその対象領域を拡大させてきている。

そこで本研究では、内部文書にも見られる「国立芸術デザイン博物館」(The National Museum of Art and Design) という名称を、今日の V&A Museum の一般的な名称とした (V&A Collections 2003 : p.5)。

3) 英国

本研究で「英国」という時には、「イングランド・ウェールズ・スコットランド・北アイルランド連合王国」(The United Kingdom) のことを指すこととする。この「連合王国」を指して「イギリス」と呼ぶ研究者や著作も多々ある。しかし本研究では、「イギリス」は「イングランド」と混同しやすいこと、また「連合王国」は日本人に馴染みが浅いこと、「駐日英国大使館」(British Embassy) という名称が一般的であることなどを考慮して、「連合王国」を指すことばとして「英国」を採用した。

4) 装飾芸術文化政策

「文化政策」といった場合、その対象領域は「芸術」の域に高められたもの、広く「生活文化」に根ざしたもの、そして「大衆娯楽」など様々である。また文化政策を「芸術」に絞った場合でも、その対象領域は、美術、装飾芸術、音楽、身体表現、文学など様々なジャンルに及ぶ。そこで本研究で「装飾芸術文化政策」という場合は、「装飾芸術」という「芸術」のジャンルに対する「文化政策」のことを指すこととする。

5 本研究の構成

このように本稿から始まる一連の論考では、装飾芸術とデザインに対する英国の芸術文化政策の特質が顕著に表れている 1 つの分野として、装飾芸術を扱う英国の博物館について考察する。そしてその代表的な事例として V&A Museum を取り上げる。

そこで第一部、すなわち本稿では、その設置および発展の歴史的経緯を概観する。**V&A Museum**はその設立当初から大英帝国の国策に従事する形をとっていたと考えられる。そのような背景の下で設置された博物館がもつ歴史や伝統の中には、装飾芸術に対する芸術文化政策が脈々と息づいていると考えられる。また最近になって英国政府が打ち出したクリエイティブ産業振興、特にクリエイティブ・デザイン産業の振興と**V&A**との関係に見られる英国の芸術文化政策の特徴を記述する。

次に第二部では、**V&A Museum**における収藏品部門の組織の変遷、収藏品の種類とその管理方針、具体的な収藏品の概要と収集計画の方針について概観する。そして**V&A Museum**の収藏品という博物館を特色付ける重要な要素の中に見られる、装飾芸術とデザインに関する英国の芸術文化政策の特徴を記述する。

更に第三部では、**V&A Museum**の常設展示、企画展覧会、出版物にみる英国の芸術文化政策の特質について述べる。始めに**V&A Museum**の常設展示と参考資料施設の基本方針としてギャラリーの分類を記す。そしてこれらのギャラリーが産業振興とインスピレーションの場になっていることを示す。さらに2001年から2010年にかけて現在進行中である「将来計画」による博物館施設の改装計画に触れ、その先導役となった「新ブリティッシュ・ギャラリー」の事例を通して、産業振興とインスピレーションの場について検証する。次に**V&A Museum**の過去約150年間の企画展覧会を地域別・分野別に分類して集計した結果を考察して得られた、企画展覧会の全般的な傾向と特徴的事項を記述する。最後に**V&A Museum**自館発行、**V&A Publications**発行、**V&A**以外の出版社が発行した、過去約150年間の図録・書籍などの出版物に関する情報を分析して明らかになった、出版物の全般的な傾向について述べる。

そして第四部では、始めに**V&A Museum**の「学芸面」に見られる英国の装飾芸術文化政策の特徴を明らかにする。具体的には、**V&A Museum**の調査研究に携わる学芸員の業務内容と要求される資質、プロジェクトチームを組む場合に設けられる「調査部門」の存在、**V&A Museum**と各種学会との関係の中に見られる芸術文化政策の特徴を記述する。また**V&A Museum**と外部機関との関係として、館外貸出方針と館外からの借用方針を概観し、**V&A Museum**の収藏品が地域の歴史的建築物の中に置かれることの意味を考察し、そこに見られる芸術文化政策の特徴を述べる。次に、**V&A Museum**の「経営面」における英国の装飾芸術に関する芸術文化政策の特徴を明らかにする。具体的には、**V&A**の商業活動について、**V&A**のブランド戦略、特に**V&A**ロゴの変遷を概観する。そして実際の商業活動を行う株式会社**V&A Enterprises**の5つの部門、すなわち出版部門、団体主催事業&企業提携部門、新規事業開拓&ライセンス部門、小売部門、画像部門(**V&A Images**)の業務内容に反映されている芸術文化政策の特徴を述べる。更に**V&A Museum**の資金調達と後援会組織として、**V&A**フレンズ、寄付会員、学生会員、**V&A**パトロン

ズ、館長サークル、企業会員、遺贈、遺産寄付控除、冠ギャラリー、入場料といった内容について芸術文化政策との関係で論じる。そして最後に全四部のまとめを述べる。

Ⅲ V&A Museum の設置・発展過程の概略

1805年のトラファルガーの戦いと1815年のウオーターローの戦いでナポレオン率いる仏国軍を打ち破った英国は、ヴィクトリア女王⁽⁴⁾のもと大英帝国（The Great British Empire）との異名をもつ強大な覇権国家への道を歩んでいた。

しかし1830年代の英国政府は、高級品の総売上に占める仏国からの輸入品の割合が高いことを憂慮していた。そこで1835年に芸術と産業に関する特別委員会が組織された。委員会は、製造業者にデザインの技術と知識を普及させるための最も有効な手段を調査するように命じられた。同時に芸術関連の公共機関の設立・管理・効果に関する調査が命じられた。そして1836年に委員会は、政府によるデザイン学校の設立と国立博物館の開設を勧告した。このようにして1837年に英国政府の官立デザイン学校（The School of Design）がサマセット・ハウスに設立された。同学校は設立されると直ぐ、教育目的で同時代の芸術品の収集を開始した（エリザベス・エスティヴ＝コール 1992：p.6）。

英国は1700年代に綿糸紡績・捺染・毛織物産業の軽工業から産業革命が起こり、やがて鉄鋼・石炭産業という重工業における産業革命が起こった国であり、1800年代には工業生産文明が形成されていた。このヴィクトリア朝では、英国の強大な国力と工業生産文明を背景に多くの工業製品が産出された。このように生産された家具調度品を英国内外から広く集めて開かれたのが、1851年にハイド・パークで開催されたロンドン万国博覧会（The Great Exhibition）であった。この万国博覧会の建物は鉄とガラスによる大建築で、ジョゼフ・パクストンが設計したクリスタルパレス⁽⁵⁾であった。

そしてこの万国博覧会に出品された展示品の一部が政府の補助金によって購入され、1852年、バッキンガム宮殿近くにあるマルボロー・ハウス（Marlborough House）に設置された製品博物館（Museum of Manufactures）に収蔵された。ロンドン万国博覧会の陰の立役者であり優秀な官吏であったヘンリー・コールが初代館長に就任した。そして若き優秀な学芸員で中世・ルネッサンス美術史家のJ. C. ロビンソンが1853年に着任し、夏期休館期間中にコールの代理を務めた。商務省への最初の年次報告書の中でコールは、「博物館を万人の教室にする」という方針を示し、「成人教育にとって博物館は最高の教育機関になる」と述べている。このようにして設立されたV&A Museumの前身である製品博物館の当初の目的は以下のようなものであった。

- ① 英国工業製品のデザインの水準を向上させること。
- ② 収蔵された装飾芸術品を一般公開して製造業者の教育に役立てること。

③ 国民の趣味教育を向上させる機関として利用すること。

この製品博物館は設立直後、精力的に重要な装飾芸術品を収集していった。しかしそれは収集すること自体を目的にした訳ではなかった。それらの収蔵品を用いて工業製品のデザイン原理を理解させること、および可能な限り大勢の人々に収蔵品を楽しんでもらうことが目的であった。したがって展示方法も教育的・啓蒙的であった (BURTON 1999 : pp.26-40、エリザベス・エスティヴ=コール 1992 : p.6)。

尚この製品博物館は一時、芸術博物館 (Art Museum) とも呼ばれたが、1853年には装飾的芸術博物館 (Museum of Ornamental Art) と改称された。その後も「デザインにおける公衆の趣味の改良」と「実用品への芸術の応用」は継承された (藤田 2003 : p.18)。

1857年に装飾的芸術博物館がその収蔵品とともに、現在 V&A Museum があるサウス・ケンジントンの敷地に移設され、サウス・ケンジントン博物館 (South Kensington Museum) と改称された。開館は 1857年6月22日であった。そして 1862年までに芸術図書館、英国絵画、彫像、銅版、建築、学術教育器具、芸術品の写真、鑄造複製品などがこのサウス・ケンジントン博物館に加えられて次第に規模が拡大していった (前掲書 : p.18)。

そして 1899年5月17日ヴィクトリア女王臨席のもと、現在その雄姿を誇る V&A Museum 本館の正面増築部分 (図1) の定礎式が行われた (図2)。アルバート殿下⁶ がその前身時代から創設に果たした重要な役割と熱心な支援とを記念して、博物館の名称はヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアムとなった。この新しい正面増築部分の建築設計者は設計競技で優勝したアストン・ウェブであった。そして竣工後の開館式は 1909年6月26日、エドワード7世臨席のもと挙行された (図3)。

装飾的芸術博物館時代およびサウス・ケンジントン博物館時代の収集活動の基本方針は、19世紀中頃のデザイン理論家ゴッドフリート・ゼンパーの指導に従い、「個々の素材におけるデザイン実践の傾向を実地教育によって教える」という目的に即したものであった。その素材とは、家具・木工、繊維、金属細工、陶磁器、ガラス器などであった。この方針はヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアム時代にも引き継がれ、1909年に新しい増築部分の建築が開館した時に、収蔵品は使用されている主要な材料別に分類され、それを管理する部署が定められた。これらを展示するギャラリーは以前「研究用ギャラリー」 (Study Galleries) として知られていたが、最近は「材料・技術・ギャラリー」 (Materials and Techniques Galleries) と呼ばれている (エリザベス・エスティヴ=コール 1992 : p.6)。

第二次世界大戦後になると、V&A Museum の発展に併せて、収蔵品の展示方法に変化が起こった。当時のリー・アストン館長は、一般公衆を惹きつける一連のギャラリーの新設が不可欠であることと、それを実現する方法として各時代の最も重要な芸術作品を展示

する「プライマリー・ギャラリー」(Primary Galleries)という「入門ギャラリー」が必要であるとの結論に達した。これは後に「芸術・デザイン・ギャラリー」に改組され、今日に至っている(前掲書:p.7)。

1991年当時の館長エリザベス・エスティヴ=コールは、第二次世界大戦後のV&A Museumの特徴として、「入門ギャラリー」すなわち後の「芸術・デザイン・ギャラリー」の開設以外に、3つの点に言及している。第一は1960年の保存部門(Conservation Department)の設立である。この部門の仕事の特性は、収蔵品の修復・クリーニングという保存技術中心であったが、次第に展示状態や保管状態の管理を含む専門技術へと変化していった。第二に学校向けの催し物を責任もって組織する独立した教育部門が設立されたことである。それまでの観衆は装飾芸術史の研究者、美術大学の学生、専門の収集家などだけであったが、1960年代以降はより幅広い層の観衆を取り込もうという本来の啓蒙活動が回復されてきた。第三に多くの来場者を迎えることができた大規模な企画展覧会が多数開催されたことである(前掲書:p.7)。

V&A Museumには幾つかの付属博物館がある。その1つベスナル・グリーン博物館は東ロンドン地区に1872年に開館した。1900年パリ万国博覧会で購入したアール・ヌーヴォー様式の家具や、英国内の家具・靴・絹織物などの地方産業製品を展示するもので、サウス・ケンジントン博物館の縮小版であった。しかし1975年にここを玩具・人形・ゲーム・児童書を収蔵する子供博物館にすることとなり今日に至っている。次に(旧)東アジア部門は、かつてV&A Museum本館とは別の建物にありインド博物館の名で呼ばれていたが、1950年代中頃にその収蔵品は本館に移設された。そして付属博物館で一番新しいものが演劇博物館である。多くのヨーロッパ諸国のように英国にも演劇博物館がなければならぬとの意見は19世紀後半からすでにあつた。しかしコヴェント・ガーデンのフラワー・マーケットに独自の博物館土地建物が取得されたのは1975年であり、開館したのは1987年であった(前掲書:p.7)。

V&A Museumは20世紀後期末まで英国王室によって運営され、科学芸術省によって管理されてきたが、1984年ついに王室統治を離れて新たな理事会統治に移行した。そしてその2年後の1986年にはV&A Museumの商業活動を行うV&A Enterpriseという株式会社が設立された。そして1988年にコーポレート・アイデンティティ(Corporate Identity: CI)を定め、1999年には「V&A」の「ブランド・アイデンティティ」(Brand Identity)を確立して21世紀を迎えた(CARR: 2005)。

さて、『戦略計画書2005年-2010年』などに述べられている通り、現在のV&A Museumは次のような運営目的を掲げている(V&A Plan 2005:p.5)。

- ① すべての人が収蔵品[である装飾芸術品とデザイン]を楽しむことを可能にすること。
- ② それら[の作品]を生み出した文化[背景]を探ることを可能にすること。

③ コンテンポラリーな〔同時代の〕デザインを制作する人々を触発すること。
これを前述のマルボロー・ハウス内に設置された製品博物館時代における運営目的と比較すると、英国におけるデザインに関係するすべての産業の振興を図るという目的は継続されていることが判る。これは製造業やデザイン産業に対する直接的な支援の姿勢である。



図1：ヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアム正面増築部分 (V&A 絵葉書)
© V&A IMAGES/VICTORIA AND ALBERT MUSEUM

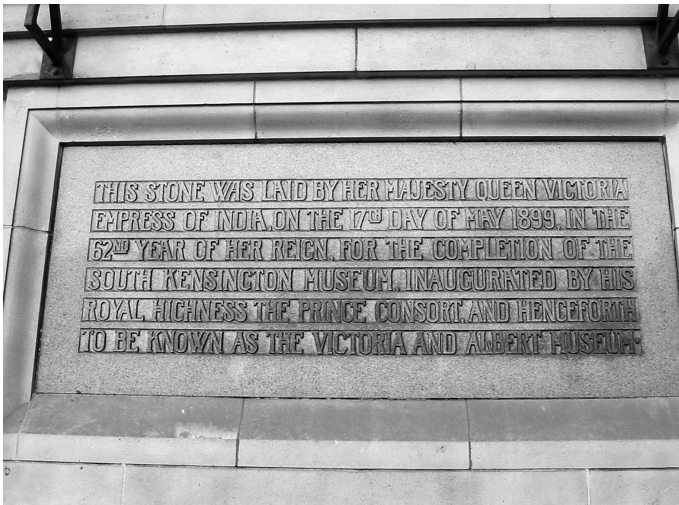


図2：定礎式プレート 1899年5月17日 (新井竜治撮影 2005.9.6)
© V&A IMAGES/VICTORIA AND ALBERT MUSEUM

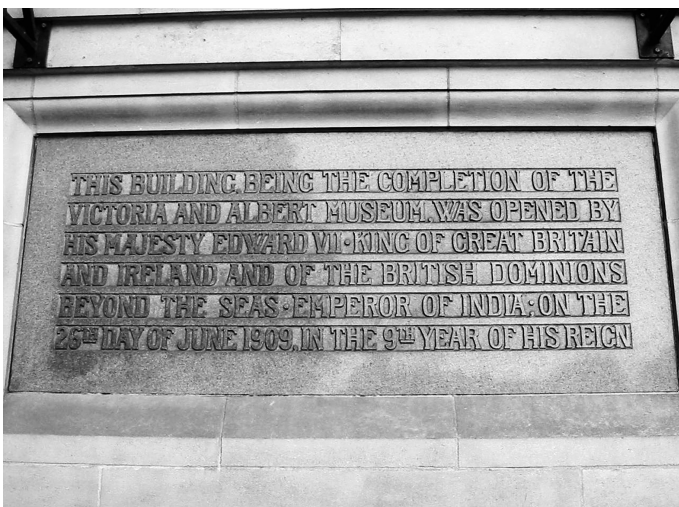


図3：開館式プレート 1909年6月26日 (新井竜治撮影 2005.9.6)
© V&A IMAGES/VICTORIA AND ALBERT MUSEUM

そしてその方法は、具体的な技術や技法を教えるというものから、産業界の創造性を触発させるというものに変化してきている。

また、それらの製品とデザインの消費者である一般公衆に対する間接的な働きかけの面でも変化が起こっている。国民の趣味を改善する教育機関という製品博物館設立当初の激しさは影を潜め、むしろ一般公衆が装飾芸術品やデザインを楽しみ、それらを生み出した文化背景を探求することを可能にするというよりソフトなものになっていることが判る。すなわち一般公衆が良質の装飾芸術品や洗練されたデザインを鑑賞し、あるいは所有して実際に使用する中で、より芸術的な生活を送ることができるようにお手伝いをしようという訳である。

VI クリエーティブ産業振興と V&A

1 クリエーティブ産業

クリエイティブ産業 (Creative Industries) とは、21 世紀初頭に英国政府が再認識し出した英国の新たな産業分野である。「クリエイティブ」というだけあって、具体的な分野は流動的であり、きちんとした枠組みが定まっていないのが現状である。大まかな概念としては、人間の創造力 (Creativity) を生かした先進産業の総称である。例えば、駐日英国大使館商務部の見解では、建築、自動車デザイン、工業デザイン、製品デザイン、マーケティング・グラフィックデザイン、ファッションデザイン、インテリア・家具デザイン、ソフトウェア・ゲーム・ハードウェアデザイン、メディア、広告、映画制作、新薬開発、バイオテクノロジーなどの分野を含む概念である (駐日英国大使館商務参事官ジェーン・オーウェン氏からの書簡、2005 年 8 月)。また 2005 年 6 月から英国大使館と英国貿易投資総省は、ウェブサイト上で英国のクリエイティブ産業関連企業を紹介する「UK クリエーティブ企業要覧」を公開している。この中で対日輸出製品・サービスは 12 の分野に分けられている。それらは、航空宇宙産業、自動車産業、バイオ・医薬品、化学、建設、デザイン、エネルギー、ファッション、金融&法律サービス、フード&ドリンク、医療・ヘルスケア、ソフトウェアの 12 分野である。そしてクリエイティブ産業に関わる具体的な英国企業要覧では、デザイン・サービス、インテリア、情報産業、自動車デザイン、メディア、ファッション、テクノロジー・サービス、建築の 8 分野に分類されている (UK Trade & Investment ホームページ 2005 年 8 月 14 日)。更にまた英国政府の文化・メディア・スポーツ省の定義によれば、広告、建築、古美術・骨董品市場、コンピューター・ゲーム・ソフトウェア・電子出版、工芸、デザイン、ファッションデザイン、音楽・映像・演劇、出版、ラジオ&テレビ、ビデオ・映画・写真の各産業のことである (V&A Plan 2005 : p.15)。

クリエイティブ産業の英国経済に対する重要度は増している。1997年から2002年の5年間における英国経済全体の成長率が3%のところ、クリエイティブ産業だけに限ると2倍の6%の成長率を達成した。同期間の輸出額の伸び率も輸出産業全体の伸び率が3%だったのに対して、クリエイティブ産業だけの輸出額の伸び率はなんと11%を記録した。2002年までにクリエイティブ産業全体の輸出額は115億ポンドを計上した。これは190万人分の雇用創出であった（前掲書：p.15）。一説によると現在の英国は、17世紀からの産業革命が花開いた18世紀以来の好景気であるようだ。その牽引役がこのクリエイティブ産業である。先進各国の第二次産業は、生産コスト削減のために生産拠点を発展途上国に移転したため、国内ではその産業に従事している人口の空洞化現象が見られる。これは世界的な現象であり、英国も日本も置かれている状況は同じである。そのような中、国内の高賃金労働者が製造した製品を輸出することによって高収益を上げられる産業は、人間の創造力を生かした先進の産業なのである。

2 V&A Museum とクリエイティブ・デザイン産業

V&A Museum とクリエイティブ産業との関係をインタビューで探ってみた。アジア部門の副部門長であるアナ・ジャクソン女史は、V&A Museum は「クリエイティブ・デザイン産業」に貢献していると明確に回答した（アナ・ジャクソン女史とのインタビュー2005年9月7日）。確かに前節で概観したように、クリエイティブ産業は「科学」と「芸術」の多岐にわたる広範囲な分野をその対象領域としている。しかし国立の芸術デザイン博物館としてのV&A Museum は、英国政府が現在振興している英国内のクリエイティブ産業の内、クリエイティブ・デザイン関連の産業を振興する役割を負っているとの認識である。

また『V&A 戦略計画書 2005年-2010年』（V&A Plan: 2005）においては、「クリエイティブ・デザイン」の項を設けている。ここではV&Aの2005年から2010年までの具体的な目標の1つを、「個人および経済における創造性を促進させ、支持し、発展させること」としている。製造業者や消費者に良いデザインを推奨する働きは、V&A Museum の設立目的の1つであった。特にV&A Museum ではクリエイティブ・デザイン産業に関わるある特定個人、企業、組織との近い関係を持っている。そしてこの関係は学術的、専門的、商業的、個別対応的である。この関連で最近行われている2つの試みがある。第一の試みの「クリエイティブ・パートナーズ」計画は、クリエイティブ・デザインを実践するデザイナーがV&Aから様々な便益を受けられるための特別会員制度である。例えばこれにより、新しいデザインの源泉となり得るアーカイヴスに容易に近づけるといった特別な待遇を受けられる。第二の試みの「デザイン教育と学習における卓越したセンター」計画は、ブライトン大学、王立英国建築家協会、王立芸術院との間の協力で、建

築やデザインの学生がどのように V&A Museum を利用しているかを調査する試みである。これは新たな V&A ウェブサイトの構築や物理的な博物館空間の再構築に有用な情報を提供している。また「将来計画」の中でもクリエイティブな建築家、デザイナー、製造会社を登用するように心掛けている。V&A Enterprises は V&A の商業活動を担当する株式会社として、クリエイティブ・デザイン産業関連の企業と太いパイプを持っている。この点でも V&A はクリエイティブ・デザイン産業を振興している。そしてこの創造性は建築や製品といった目に見えるものばかりではなく、問題解決の技法、新しい方法の認識、新鮮なアイデアを形にするといった知恵にこそ表れるから、何よりも V&A スタッフ全員の創造性が表出して社会に認知されることを求めるという計画が定められている (V&A Plan 2005 : p.15-17)。

3 駐日英国大使館商務部の活動

英国政府がクリエイティブ・デザイン産業の輸出に熱心である証は、ここ数年開催されている東京デザイナーズ・ウィークとのタイアップ企画に表れている。論者は 2003 年から 2005 年までの間、駐日英国大使館が主催する「デザイン UK シンポジウム」あるいは「デザイン UK フォーラム」に毎年出席させていただいた。その概略は以下の通りである。2003 年 10 月 Design UK Symposium: V&A Enterprises プレゼンテーション、2004 年 10 月 Government & Design Symposium : 更なるデザイン振興を目指して一未来を見据えた日英協働一、①サー・アンドリュー・サマーズ卿 (デザイン・カウンシル) のプレゼンテーション、②日本の経済産業省のプレゼンテーション「デザイン活用で企業が変わる」、同年 Stylish Britain : サー・テレンス・コンラン卿のプレゼンテーション、同年 The Best of British Design : コンラン卿、ジェームズ・ダイソン氏、喜多俊之氏のパネルディスカッション、2005 年 11 月 Design UK Forum : トム・ディクソン氏、トーマス・ヘザウィック氏などのプレゼンテーション、同年 100% Design in Tokyo の初開催などである。このように、現在の英国は日本を英国デザイン産業界の有望な輸出先とみなしている。21 世紀初頭の日英関係は新たな段階に入ったと考えられる。

V おわりに

1852 年に設置された製品博物館時代の活動目的は大きく 2 つに集約される。第一は英国工業製品のデザイン水準を向上させるために産業界を教育することであった。第二は消費者である国民の趣味を向上させるための教育をすることであった。1 世紀半を経た 21 世紀初頭の活動目的はやはり大きく 2 つに集約される。第一はあらゆる人々が収蔵された装飾芸術品とデザインを楽しみ、それを生み出した文化背景を探ることができるように環境を整備することである。第二は現在活躍中のコンテンポラリーなデザイナーの創造性

を触発することである。この両者を比較すると、英国におけるデザインに関係するすべての産業の振興を図るといった目的は継続されていることが判る。しかしその方法は具体的な技術や技法を教えるというものから、産業界の創造性を触発させるというものに変化してきている。またその装飾芸術品とデザインの消費者である一般公衆に対する働きかけも継続していることが判る。しかしその姿勢は英国国民の趣味を改善するというものから、あらゆる年代の、あらゆる階級の、あらゆる国々の人々が、収蔵品である良質の装飾芸術品とデザインを楽しみながら、それを生み出した文化背景を主体的に学べるように環境を整備しようというものに変化してきている。

その他に興味深い点は、現在の V&A Museum が「一般公衆に対する働きかけ」をその運営目的の最初に挙げていることである。それから、「すべての人」という言葉に表されている通り、国際的な観衆の教育という点は、近年英国政府がデザイン産業の輸出に力を入れていることと連動している。

近年の V&A は英国政府が掲げるクリエイティブ産業振興の方針を受けて、クリエイティブ産業のうち、特に「クリエイティブ・デザイン産業」の振興に力を入れている。具体的には「クリエイティブ・パートナーズ」計画、「デザイン教育と学習における卓越したセンター」計画などが始動している。現在の V&A はまさに「水を得た魚」である。

V&A Museum の設置・発展過程、クリエイティブ・デザイン産業と V&A の関係の中には、以上のような装飾芸術とデザインに対する英国の芸術文化政策があることが判る。

凡例

V&A Museum

ヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアム本体を指す。正式名称は **Victoria and Albert Museum** である。日本においては、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館と称されることが多い。また **Museum** を博物館と訳して、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館と称されることもある。訳語が定まっていないので、本研究では全語を表記する場合は、ヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアムを用い、短縮形は **V&A Museum** を用いることにする。

V&A Enterprises

ヴィー・アンド・エー・エンタープライズ株式会社を指す。正式名称は **V&A Enterprises Ltd.** である。

V&A

ヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアムに関係する組織の全体を表すブランド名である。**V&A Museum** や **V&A Enterprise** などすべてを含む概念の場合に用いる。

DCMS

文化・メディア・スポーツ省を指す。正式名称は **Department of Culture, Media and Sport** である。**V&A** などの国立博物館を管轄する英国政府の省である。

RIBA

英国王立建築家協会のこと。正式名称は **Royal Institute of British Architects** である。

NAL

国立芸術図書館のこと。正式名称は **National Art Library** である。

AAD

芸術・デザイン・アーカイヴのこと。正式名称は The Archive of Art and Design である。

将来計画

2001 年から 2010 年にかけて実施している Future Plan のことである。

クリエイティブ産業

2000 年頃から英国政府内でその育成保護が議論され出した Creative Industry のことである。

外国人人名の日本語による綴り方

吉川涼子編：2002 『カタカナから引く外国人綴り方辞典』, 東京：日外アソシエーツ。に可能な限り則り表記した。

引用・参考文献一覧

* 日本語文献は著者・編者名の五十音順に、欧文文献は著者・編者名のアルファベット順に配列してある。

- ・天野知香：2001 『装飾／芸術—19-20 世紀フランスにおける「芸術」の位相』, 東京：ブリュッケ。
- ・石森秀三：2003 『改訂版 博物館概論』, 東京：放送大学教育振興会。
- ・エリザベス・エステイヴ＝コール：1992 『ヴィクトリア & アルバート美術館—SCALA/MISUZU 美術館シリーズ 8』, 田辺徹 (訳), 東京：みすず書房。
- ・鬼頭智美：2003 「ロンドンの大型博物館・美術館における広報活動について—大英博物館の事例を中心に」, 『東京国立博物館研究誌』, 東京国立博物館編, 2003 年 6 月, 584 号：pp.37-48, 東京：中央公論事業出版。
- ・鬼頭智美：2005 「博物館としてのブランドについて」, 『東京国立博物館研究誌』, 東京国立博物館編, 2005 年 4 月, 595 号：pp.81-98, 東京：中央公論事業出版。
- ・菅靖子：2000 「悪趣味の展示—装飾製品美術館の『恐怖の部屋』」, 『デザイン学研究』, 研究発表大会概要集 Vol47：pp.16-17, 東京：日本デザイン学会。
- ・菅靖子：2001 「ヴィクトリア朝における趣味の政治学—装飾美術館の『戦慄の間』」, 『一橋論叢』, 第 125 巻 第 3 号：pp.262-279, 東京：一橋大学。
- ・棚橋源太郎：1947 『世界の博物館』, 東京：講談社。
- ・徳丸吉彦：2003 『芸術文化政策 I—社会における人間と芸術』, 東京：放送大学教育振興会。
- ・利光功：2000 「工芸と装飾美術—比較芸術学的考察」, 『東京工芸大学芸術学部紀要』, 巻号 6：pp.79-83, 東京：東京工芸大学。
- ・藤田治彦：2003 『西洋の工芸博物館の比較研究—デザインミュージアムの原型・日本の博物館の史的モデルとして』, 平成 12 年度—平成 14 年度科学研究費補助金 (基盤研究 C) 研究成果報告書, 課題番号：12610054, 大阪：大阪大学。
- ・横溝廣子：2003 「『工芸の世紀』の意味」, 『工芸の世紀—明治の置物から現代のアートまで』：pp.8-17, 東京：東京藝術大学大学美術館。
- ・BURTON, Anthony: 1999 *Vision and Accident: The Story of the Victoria and Albert Museum*. London: V&A Publications.
- ・CARR, Heather V&A: 2005 *The V&A Logo Time Line, Personal Document*, London: V&A Enterprises Ltd.
- ・V&A Collections: 2003 *Collections Management Policy*. London: Victoria and Albert Museum.
- ・V&A Collections: 2004 *V&A Collecting Plan Including Acquisition & Disposal Policy*. London: Victoria and Albert Museum.
- ・V&A Plan: 2005 *V&A Strategic Plan 2005-2010*. London: Victoria and Albert Museum.

注

- (1) 1871年(明治4年)岩倉使節団がサウス・ケンジントン博物館を訪問して、日本にも国立博物館を設立する必要性を実感したといわれている。
- (2) **Vision & Accident**の頭文字をとると**V&A**となる。これは一種の洒落であり、**Victoria and Albert Museum**すなわち**V&A Museum**は、その設置と発展の過程において、深遠で明確なヴィジョンを持っていたが、様々なアクシデントに見舞われた。そして幾多の困難を克服して、今日まで発展してきたということを表す隠喩でもある。
- (3) 2003年10月10日、駐日英国大使館(東京)におけるカンファレンスにおいて、**V&A Enterprises**ライセンス部長(当時)ヘザー・カー女史のスピーチより。
- (4) ヴィクトリア女王の在位は1831年から1901年であった。世界各地を植民地化し一大植民地帝国を築き上げ、インド女帝に即位し、「君臨すれども統治せず」によって議会制民主主義を貫いた。彼女の寵愛するベンジャミン・ディズレーリ、そして、良き夫であるアルバート殿下の助言によって大英帝国を繁栄させた。
- (5) クリスタルパレスは水晶宮とも訳される。
- (6) アルバート殿下(1819-61)は1861年に亡くなっている。1851年のロンドン万国博覧会、1852年の製品博物館(1853年に装飾的芸術博物館と改称)の創設、1857年のサウス・ケンジントン博物館への移転という**V&A Museum**の創設期における、アルバート殿下の数々の労をねぎらうために、ヴィクトリア女王は夫アルバート殿下の名を自らの名と連ねたと言われている。